

## マダガスカル アンタナナリボ大学を訪ねて 福田 邦夫\*

### マダガスカルとは？

マダガスカルの別名は「赤い土の島」。国土は日本の約2倍、その半分は赤褐色の土で覆われた不毛の大地。だが残りの半分は豊かな自然に恵まれた豊穡な大地であり、人類に残された最後の楽園とも言われている。世界には動植物種が約25万あるが、このうちの70%はマダガスカルにしかない。

それゆえ世界銀行、ユネスコをはじめとする国際機関は、マダガスカルの自然環境を保護するために膨大な資金援助を展開している。2005年、日本でもドリームワークス・アニメーション「マダガスカル」が大ヒットした。このアニメには動物は登場するが、マダガスカルの人々の姿は一切登場しない。

しかし、自然環境に恵まれたこの国は重債務最貧国（HIPC）であり、総人口約1600万人のうちの約1200万人（75%）が農村で生活を営み、12世紀と何ら変わらない方法で農業と牧畜に従事している。農村の世帯数は200万世帯以上と見られている。ここ数年来、農村社会は以前よりも一層貧困化が著しく、このため農村の社会構造そのものが大きく揺すぶられ、不安定化している。70～80%もの人々が絶対的貧困ライン（1日1ドル以下）

---

\* 福田 邦夫／くにお／商学部教授／国際貿易論、国際経済学／前アフリカ文庫選定委員会委員長／2006年度に在外研究でマダガスカルに滞在

での生活を余儀なくされている。

海岸線は約 5000km、海洋資源に恵まれており、鮪、ブラック・タイガーを中心とする魚類は、繊維製品に次ぐ第2の輸出品目である。とはいえ、漁業に従事しているのは日本の大洋漁業を中心とする外国の企業で、マダガスカル政府は入漁料を受取っているだけであり、近年、乱獲のため漁獲量は著しく減少している。その上、マダガスカル沿海は世界で第5番目にランクされるまでに汚染されている。沿海を巨大な石油タンカーが絶えることなく往来し、タンカーから海洋に打ち捨てられた漂流物が流れ着くので、この島は漂流物の墓場とまで言われるようになっている。

また近年、非合法移民が急増しており、これら移民は海から上陸してくる。こうした事態に対してマダガスカルには1隻のパトロール艇、1隻の曳航船、6隻の哨戒艇しかない。また港湾関税事務所は3カ所のみで職員はわずか500人、沿海警備隊は8部隊、沿岸水先案内人は8人しかいない。マダガスカルから国外に輸出される商品の約半分が税申告をすることなく不正に輸出されており、このため政府の税収3億4670万ドルが遺漏しているものと推定されている。なかでも魚介類の密輸出は著しい。魚介類だけではなく、サファイア、海亀、熱帯の材木、丁子、バニラ、コブ牛までもが密輸出されている。加えて、兵器、金、麻薬の密輸出、そして人身売買も行われている。この国は世界で最も天然資源に恵まれていると言われながら、一方では世界で最も貧しい国とも言われるのである。

## マダガスカルの現状

マダガスカルは1960年にフランスから独立した。だが、独立してから1975年までの15年間、絶える事のない政治的混乱がつづいた。1975年から2001年までの26年間、社会主義社会の建設を標榜するラテスカラ大統領が権力を掌握した。同大統領は、社会主義革命を宣言し、同時に大統領が絶大な権限を持つ第3共和国樹立を宣言した。だがこの間、権力は限りなく腐敗し、マダガスカルの経済は驚くべき勢いで衰退、重債務貧困国に陥った。

ラテスカラ大統領は2001年12月の大統領選挙に再出馬したが、同選挙

にはアンタナナリボ市長ラバロマナナが立候補した。不透明な大統領選結果をめぐるマダガスカルの世論は二分され、ラテスカラ支持、ラバロマナナ支持派は相互に道路をバリケードで封鎖し、首都ではゼネストが行われ、同国の経済は麻痺状態に陥った。2002年1月25日、憲法高等裁判所は、大統領選の投票を再集票し、4月29日、選挙結果を公表（ラテスカラ35.9%、ラバロマナナ51.46%）、ラバロマナナを大統領として認定した。このためラテスカラは7月5日、蓄財した巨額の資金と家族、腹心の部下一族を率いてフランスに亡命した。

4年後の2006年12月に大統領選挙が行われ、ラバロマナナ大統領が第2期大統領を目指して立候補し当選した。ラバロマナナ大統領はティコ財団の総裁であり、傘下にはラジオ・TV、食品、化学、石油関連企業約30社を擁している。同大統領は私財を投じてマダガスカルの危機を打開するのか、それともマダガスカルをティコ財団に編入するのかが注目される。

## アンタナナリボ大学

マダガスカルには6つの国立大学があるが、アンタナナリボ大学は7学部（法学部、経済学部、経営学部、社会学部、文学・人文学部、理工学部、医学部）の他、高等師範学校、農業高等専門学校、理工研究所、文明・芸術・考古学研究所、地球物理学研究所、エネルギー制御研究所、新エネルギー研究所が併設されている。6つの国立大学の学生総数は1万7000人。このうちの約1万2000人（約70%）がアンタナナリボ大学に在籍しており、他の5大学の在学数は5000人にしかすぎない。

しかも入学した学生で1学年から2学年に進級するのは50%に過ぎず、半分は途中で退学する。全課程を修了し卒業するのは新入生の20%前後と見られている。また卒業したところで就職先はなかなか見つからない。

教授陣にしても大学の給与だけでは家族を養うことができない。明治大学OBのラミアリソン・エメ教授は、教壇に立つ傍ら労働省の雇用促進局長として活躍しており、彼の同僚もレストランやホテル、それにレンタカー会社など多角経営をしている。

約70ヘクタールにも及ぶ赤褐色の広大なキャンパスには、同じく赤褐色



の煉瓦造りの校舎が学部ごとに散在している。校舎はマダガスカルが1960年に独立した時、ド・ゴール大統領がこれを祝し新政府に寄贈した。2階建ての図書館（写真）はキャンパスの中央部にあり、同大学を訪問した2006年10月3日は、入学式が執り行われていた。入学式とはいえ、2000人近い新入生を収容できる建物はなく、炎天下の元、図書館前の狭い広場での式であった。入学式にはジャック・シラ首相、教育・科学技術相らが訪れ、祝辞を述べていた。新入生は整列するわけでもなく、三々五々集まり、図書館前の芝生や土手の上に座って耳を傾けていた。

隣に居た学生の話によると、アンタナナリボ大学の教職員は、給与が未払いのため、8月から9月初旬までストライキをしたとのこと、また同大学学生寮では、学生らの電気料金未払いに対し大学が電源を切断したため、寮生もまた奨学金の給付制度拡充を求めてストライキをしたとのことであった。

首相一行が去った後、図書館を見学した。1階の半分が閲覧室であり、座席数は約250。書籍を検索するためにはカード・ボックスを引出して、一枚、一枚、カードを捲らなければならない。図書館を利用するにあたって、マダガスカル人学生は年間1000アリアリ（53円）、外国人学生は2000アリアリ（106円）を納入して入館証をもらわなければならない。奨学金が月額1500アリアリだから、学生にとっての1000アリアリはばかにならない額だ。

蔵書は約2万冊と聞いたが、そのほとんどが卒業論文、修士論文、博士



の煉瓦造りの校舎が学部ごとに散在している。校舎はマダガスカルが1960年に独立した時、ド・ゴール大統領がこれを祝い新政府に寄贈した。2階建ての図書館（写真）はキャンパスの中央部にあり、同大学を訪問した2006年10月3日は、入学式が執り行われていた。入学式とはいえ、2000人近い新入生を収容できる建物はなく、炎天下の元、図書館前の狭い広場での式であった。入学式にはジャック・シラ首相、教育・科学技術相らが訪れ、祝辞を述べていた。新入生は整列するわけでもなく、三々五々集まり、図書館前の芝生や土手の上に座って耳を傾けていた。

隣に居た学生の話によると、アンタナナリボ大学の教職員は、給与が未払いのため、8月から9月初旬までストライキをしたとのこと、また同大学学生寮では、学生らの電気料金未払いに対し大学が電源を切断したため、寮生もまた奨学金の給付制度拡充を求めてストライキをしたとのことであった。

首相一行が去った後、図書館を見学した。1階の半分が閲覧室であり、座席数は約250。書籍を検索するためにはカード・ボックスを引出して、一枚、一枚、カードを捲らなければならない。図書館を利用するにあたって、マダガスカル人学生は年間1000アリアリ（53円）、外国人学生は2000アリアリ（106円）を納入して入館証をもらわなければならない。奨学金が月額1500アリアリだから、学生にとっての1000アリアリはばかにならない額だ。

蔵書は約2万冊と聞いたが、そのほとんどが卒業論文、修士論文、博士

論文、そして教科書類であり、新刊本はほとんどない。また雑誌や新聞の閲覧室もなければ、パソコンもコピー機もない。

大学の環境は、まだまだこのような状況にあるとはいえ、アンタナナリボ大学に進学できるのはエリートの中のエリートであり、マダガスカルで大学に進学できるのは進学年齢人口（18歳～21歳）のわずか7%にしかすぎない。ちなみに、2004年度の政府発表によれば、小学校（5年間）に入学するのは入学年齢人口の約98%だが、5年間の初等教育課程を終えて卒業するのは47%、中等教育（6年間）を終えるのは31%でしかない。しかし、ユネスコの統計によれば、2000年度に中等教育を終えた生徒は、入学時の1%であったから、事態は徐々に改善されているのは確かだ。

マダガスカルの現状は決して楽観視できるものではない。総ての児童が教育を受けられる日が来るよう願う。

ところで、明治大学図書館は2005年7月に、エメ教授を招いてアフリカ文庫講演会を開催した。この講演会に来日中の同大学ミシェル教授が出席され、講演会終了後に原館長と会談し、図書館が仲介して、双方の大学が刊行する欧文の紀要類を交換することが合意された。本学からは「Meiji law journal」などが、アンタナナリボ大学からは「Taloha」などがリストアップされ、既に昨年の秋から学部・大学院の協力のもとで実施されている。明大図書館からは、リサイクル図書の寄贈なども検討されているようである。図書館とアフリカ文庫が両大学間の学术交流と教育・研究の発展に寄与することは素晴らしいことである。ひいては両国間の関係にまで深まっていく契機になることを、遙かマダガスカルの地から期待している。（2006.12 アンタナナリボ大学にて）